

認知症 そのままでいい

第2回

「本人の意思を尊重する」とは？

認知症の本人の意思を尊重する、本人の視点を取り入れる、というかけ声が盛んに聞かれるようになった。

テレビや新聞に、認知症当事者が登場し、語っている姿も増えている。政府もメディアも認知症の問題に取り組もうとしている様子がわかる。しかし、問題はまだまだ大きい。

政府は、2015年に「認知症施策推進総合戦略（通称・新オレンジプラン）」を打ち出し、基本的考え方として「認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す」を掲げた。その施策の「7つの柱」の1つには、「認知症の人やその家族の視点の重視」という項目がある。これ自体は前進であり、喜ばしいことである。しかし、本当にこの「当事者の視点の重視」の考え方が、新オレンジプランの中に生きているのかについては大いに疑問がある。ただ単に、認知症の人の意見を聞けばいい、何か事を決めるときにその声に耳を傾ければいい、と考えているのではないか。もちろん、声を無視して聞かないよりずっといいが、それだけでは本質的に足りないのである。

本人の視点とは心情の尊重

施策の柱になっている「認知症の人の視点」とは何か。それは、認知症の人の気持ちになることではないか。認知症の人の感じ方や思いを知ること、心情を尊重することではないか。本人の意思や意見を尊重することにとどまらず、その点をもっとはつきりさせたい。

「本人の心情を尊重する」視点は、7つの柱の1つに入れるだけではなく、新オレンジプランのすべての項目の基調となるべきことであろう。そのような基本姿勢で他の施策が作られているとはとても思えない。介護者視点、社会の側視点になっている傾向がまだまだ強い。重要なことがらや局面で、本人の意思を聞くことも当然大事なことだ。しかしそれ以上に、日常的な場面、ふだんのささいな事柄でも、常に本人を「人」として尊重するという態度、通常の「人」の感情をもった存在として対応することがまず基本である。認知症という疾患をもった人としてみるのではなく、「人」として気持ちを考え、対応をするという姿勢がもっと強調されてよい。

早く見つけてどうするのか

例えば、7つの柱の第一に挙がっている「認知症の理解をすすめるための普及・啓発」。そこには、「人」として尊重するという視点が足りていない。認知症をどう理解するかという観点のベースに、本人の心情の尊重を加える必要がある。心理的につらい状態に追い込まれやすいこと、心理的には正常に「反応」をするからこそつらい気持ちになること、それが「BPSD（認知症の行動心理症状）」と呼ばれる状態を引き起こしてしまうこと、などは必須の基本的ことがらである。もし、「認知症の理解」が疾患としての理解（脳の疾患としての理解）だけで行われるなら、むしろそれは偏見を強めるだけになってしまう。もう1つの柱には「適時・適切な医療・介護等の提供」がある。この中では、「発症予防」から「発症初期」などの流れが示され、「早期診断・早期対応」が強調されている。しかし、予防と早期診断は、素直には自ら認めづらい病気を探り出すという意味で、本人の自尊心や自己肯定感をもっとも乱しやすい場面なのである。その点をよくわかって、十分意が用いられているだろうか。現実には、全国各地で「早期発見・早期介入」といった呼びかけのもと認知症対策が推進されている。早くみつけることに躍起になっているようにみえる自治体もある。これは果たして「適時・適切」なのか。基本であるべき「本人の意思の尊重」はどうなっているのか。早く見つけて何をしようと（させようと）するのか。何ができ、どんなメリットがあるのか。本人の気持ちを考えた介入なのか。それらを考えたうえでの「対策」でなければ意味がない。早すぎる介入は余計なお世話であり、有害無益である。本人を傷つけてしまったら、早期介入しても自己肯定感を下げた逆効果である。

メディア報道もちぐはぐな姿勢

メディアもまた、報道の姿勢と内容がちぐはぐである。

朝日新聞は、今年1月16日に「認知症の自分を生きる」という特集記事を1つの面全部を使って大きく展開した。「認知症になっても『人生終わり』じゃない。そう考える本人同士が集い、地域社会で活動する場が広がってきた」「当事者たちの声に耳を傾け、政策に生かす取り組みも始まっている」と書き、「主体的に人生を送る人」として、さまざまな認知症の人や活動を取り上げた。記事の中には、認知症の当事者が「何もわからなくなった人」という偏見にさらされてきた状況や、当事者らで設立した日本認知症ワーキンググループが「『認知症だと外出は危険』という一律の考え方や、過剰な監視や制止は、私たちが生きる力や意欲を著しく蝕みます」という内容で厚労省に要望したという動きも盛り込まれていた。ともに、認知症に対する社会の偏見をただすための大切な問題提起であり、新聞メディアの自戒と決意を示しているように読めた。

それは、これまでの認知症キャンペーン記事の中で、問題点や悲観的な側面を取り上げることが多かった朝日新聞の「転換宣言」にもみえた。すべての新聞・放送メディアがこのような姿勢であってほしいと思わせる記事であった。

ところが、そのたった2日前の同紙「天声人語」では、相も変わらぬ介護者視点の記事が堂々と載っていたのである。

「認知症が進み、ふいに家を出てさまよう高齢者」。住所や連絡先を言えない状態で遠方へ迷い出してしまう例があつたを絶たない。家族は不安を抱え、片時も休まらない」。この一な書き方はなんだろうか。迷い方的出してしまう人の気持ちはどう考えているのか。認知症の人が、ふだんどんな気持ちで生活を送り、どんな思いで家を出てさまよってしまうのか。そこにまったく思いが及んでいない。認知症の人は「何もわからなくなった人」。その偏見にこり固まった書き方である。これでは、45年前の『恍惚の人』の認知症観と変わっていない。偏見をなくそうという特集記事は、いったい何だったのか。

迷い出る人の心情に思いを

この日の「天声人語」では、徘徊の対策として高齢者の爪にQRコードの印刷されたシールを貼るといふある自治体の取り組みが紹介されていた。コードに携帯電話をかざせば、画面に住所地の市役所の電話番号が現れる仕組みだといふ。「天声人語」は、徘徊問題の解決に仕組みづくりが大切だと、いつも結論づける。今回も同じ論調であつた。

迷い出る人がいる以上、もちろんそれも大切だろう。しかし、それを書くなら同時に、「認知症の人はどんな気持ちで家を出るのでしょうか。どれほど不安でやるせない気持ちでしょうか。周囲の人たちは、病をもつたご本人が楽しく生活できる対応や工夫を十分できているでしょうか」と、なぜ問ひかけないのか。それこそが、2日後の記事で紹介された「認知症の自分を生きる」「当事者の声に耳を傾ける」を実現することになるのではないか。そのことに気づきがない。「『認知症だと外出は危険』という一律の考え方や、過剰な監視や制止は、私たちが生きる力や意欲を著しく蝕みます」といふ認知症ワーキンググループの声を、天声人語は聞いているはずだ。聞いているなら、それを踏まえて「天の声」を発してほしい。(筆者は、以上のことを朝日新聞に投書で伝えた。)

理想のかけ声を掲げても、結局は表面的な理解だけで、本当の理解に至っていない。「本人の意思を尊重する」「本人の視点を取り入れる」とうたつて中身の浸透が不十分な政府の施策。それをチェックすべき新聞メディアが同じことをやっていると困る。

本論文は、メディカ出版「医療と介護Next」に掲載されたものです。そのため、一部の内容に執筆当時の情報がございます。



うえだ さとし
上田 諭

日本医科大学医学部講師。新聞記者から医師に転身し、精神科で高齢者中心に診療。医師を含め認知症に関わる専門職は、家族など介護者だけでなく本人を尊重すべきだとの姿勢で患者に寄り添う。